# 器楽　石井信夫の足跡を追う

## ドラム缶のティンパニまで作った執念

石井は栃木県で最初のオーケストラを、高校生の手によって創ろうとした。

とはいえ、楽器や楽譜はおろか生活物資すら満足に手に入らない当時、集団で器楽の演奏を行うというのは、半ば夢のような話であった。国内の楽器メーカーもやっと軍需産業を離れて復旧したばかり、という折である。

しかし、そんな中でも音楽をやりたいという生徒達が楽器をかき集め始める。石井が教鞭を執る宇都宮高校に持ち寄られた楽器の大半は質の劣る中古品などで、中には骨董品屋から5円で購入してきたというヴァイオリンもあった。石井はそれらを演奏に耐えうる状態にし、昭和23年には弦楽合奏団を創設。そして25年には音楽部管弦楽団を創設した。

もっとも、どうしても入手の困難な楽器もあった。ティンパニがその一つである。

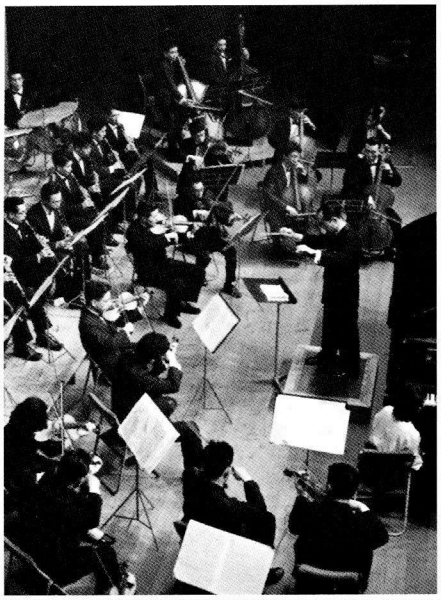
苦心の末、石井はなんと自らドラム缶を改造してティンパニを製作し、生徒達に与えたのだった。

通常のものと比べても音質に遜色が無かったというこの「ドラム缶ティンパニ」は、その後20年以上にわたり使用され、現在も宇都宮高校に保管されている（写真）。

当時の宇都宮高校弦楽合奏団の練習風景（昭和24年）

このような悪条件の中から生まれた楽団ではあったが、石井は音に妥協することなく厳しく指導した。また、生徒にヴァイオリンのレッスンを施すなどして協力した、尾島綾子（旧姓宮下）など同声会メンバーの指導もやはり厳しかったという。

文化的な活動に飢えていた生徒達もまた、こうした指導者達の熱意に負けじと練習に励み、その年のうちに交響曲・協奏曲を公演するに至る。終戦後間もないこの時期は停電も多く、ときには理科室でろうそくの明かりを頼りに練習することもあった。



宇都宮交響楽団の演奏会。結成当初の名称は「宇都宮青年交響楽団」であり、
コンサートマスターの永岡国雄をはじめ、二十代の若い団員が中心となっていた。

## 学校の枠を超えて影響を与える

この管弦楽団はたんに宇都宮高校のためのものではなく、より多くの青少年に音楽文化を広めるためのいわば「足がかり」であった。

結成の翌26年になると、石井は管弦楽団の生徒達を率いて、今市中学校や栃木女子高校など、県内各地の学校への出張演奏を始める。また、ユリス・バレエ団と共演するなど、その画期的な活動は注目を浴びるようになっていった。

このようにして管弦楽の魅力を知る若者達が少しずつ増え、昭和29年の「宇都宮交響楽団」の結成へとつながっていく。高校の一室で、粗末な楽器を集めて誕生した管弦楽団は、学校の枠を超えて、音楽文化の灯を県内各地にともしていったのである。